

色	上の句	下の句	決まり字 (競技かるた)	決まり字 (五色百人一首)
青	朝ぼらけ有明の月と見るまでに	吉野の里に降れる白雪	あさぼらけあ	あさ
青	足曳の山鳥の尾のしだり尾の	長々し夜を独りかも寝む	あし	あし
青	天つ風雲の通ひ路吹きとじよ	をとめの姿しばしとどめむ	あまつ	あま
青	嵐吹く三室の山のもみぢ葉は	龍田の川の錦なりけり	あらし	あら
青	有明のつれなく見えし別れより	暁ばかり憂きものはなし	ありあ	あり
青	いにしへの奈良の都の八重桜	けふ九重に匂ひぬるかな	いに	い
青	憂かりける人を初瀬の山おろしよ	はげしかれとは祈らぬものを	うか	う
青	奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の	声聞く時ぞ秋は悲しき	おく	おく
青	思い侘びさても命はあるものを	憂きにたへぬは涙なりけり	おも	おも
青	鵲の渡せる橋に置く霜の	白きを見れば夜ぞ更けにける	かさ	か
青	君がため惜しからざりし命さへ	永くもがなと思ひけるかな	きみがためを	きみ
青	きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに	衣かたしき独りかも寝む	きり	きり
青	この度はぬさも取りあへず手向山	紅葉の錦神のまにまに	この	こ
青	寂しさに宿を立ち出でてながむれば	いづこも同じ秋の夕暮れ	さ	さ
青	契りおきしさせもが露を命にて	あはれ今年の秋もいぬめり	ちぎりお	ち
青	陸奥の信夫もちずり誰故に	乱れそめにし我ならなくに	みち	み
青	巡り逢ひて見しやそれともわかぬ間に	雲がくれにし夜半の月かな	め	め
青	百敷や古き軒端のしのぶにも	なほあまりある昔なりけり	もも	も
青	夜をこめて鳥の空音ははかるとも	世に逢坂の関は許さじ	よを	よ
青	和田の原漕ぎ出でて見れば久方の	雲みにまがふ沖つ白波	わたのはらこ	わ

色	上の句	下の句	決まり字 (競技かるた)	決まり字 (五色百人一首)
ピンク	秋の田のかりほの庵のとまをあらみ	わが衣手は露にぬれつつ	あきの	あき
ピンク	有馬山猪名の笹原風吹けば	いでそよ人を忘れやはする	ありま	あり
ピンク	恨み侘び干さぬ袖だにあるものを	恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ	うら	う
ピンク	音に聞く高師の浜のあだ浪は	かけじや袖のぬれもこそすれ	おと	お
ピンク	かくとだにえやはいぶきのさしも草	さしも知らじな燃ゆる思ひを	かく	かく
ピンク	風をいたみ岩打つ波のおのれのみ	くだけれ物を思ふころかな	かぜを	かぜ
ピンク	来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに	焼くや藻塩の身もこがれつつ	こぬ	こ
ピンク	しのぶれど色に出でにけりわが恋は	物や思ふと人の問ふまで	しの	し
ピンク	高砂の尾上の桜咲きにけり	外山の霞立たずもあらなむ	たか	たか
ピンク	田子の浦にうち出でて見れば白妙の	富士の高嶺に雪は降りつつ	たご	たご
ピンク	立ち別れいなばの山の峰に生うる	まつとし聞かば今帰り来む	たち	たち
ピンク	誰をかも知る人にせむ高砂の	松も昔の友ならなくに	たれ	たれ
ピンク	筑波嶺の峰より落つる男女川	恋ぞつもりて淵となりぬる	つく	つ
ピンク	長ならむ心も知らず黒髪の	乱れて今朝はものをこそ思へ	ながか	ながか
ピンク	永らへばまたこの頃やしのばれむ	憂しと見し世ぞ今は恋しき	ながら	ながら
ピンク	嘆けとて月やはものを思はする	かこち顔なるわが涙かな	なげけ	なげ
ピンク	吹くからに秋の草木のしをるれば	むべ山風を嵐といふらむ	ふ	ふ
ピンク	もろともにあはれと思へ山桜	花より外に知る人もなし	もろ	も
ピンク	山里は冬ぞ寂しさまさりける	人目も草もかれぬと思へば	やまざ	や
ピンク	世の中よ道こそなけれ思ひ入る	山の奥にも鹿ぞ鳴くなる	よのなかよ	よ

色	上の句	下の句	決まり字 (競技かるた)	決まり字 (五色百人一首)
黄	秋風にたなびく雲の絶え間より	もれ出づる月の影のさやけさ	あきか	あき
黄	浅茅生の小野の篠原しのぶれど	あまりてなどか人の恋しき	あさじ	あさ
黄	天の原振りさけ見れば春日なる	三笠の山に出でし月かも	あまの	あま
黄	淡路島通う千鳥の鳴く声に	いく夜寝ざめぬ須磨の関守	あわじ	あわ
黄	大江山いく野の道の遠ければ	まだふみも見ず天の橋立	おおえ	お
黄	これやこの行くも帰るも別れては	知るも知らぬも逢坂の関	これ	こ
黄	白露に風の吹きしく秋の野は	つらぬきとめぬ玉ぞ散りける	しら	し
黄	住の江の岸に寄る波寄るさへや	夢の通ひ路人目よくらむ	す	す
黄	滝の音は絶えて久しくなりぬれど	名こそ流れてなほ聞こえけれ	たき	たき
黄	玉の緒よ絶えなば絶えね永らへば	しのぶる事の弱りもぞする	たま	たま
黄	花さそふ嵐の庭の雪ならで	ふりゆくものはわが身なりけり	はなさ	はな
黄	春過ぎて夏来にけらし白妙の	衣干すてふ天の香具山	はるす	はる
黄	久方の光のどけき春の日に	しづ心なく花の散るらむ	ひさ	ひ
黄	ほととぎす鳴きつる方をながむれば	ただ有明の月ぞ残れる	ほ	ほ
黄	み吉野の山の秋風さ夜更けて	ふるさと寒く衣うつなり	みよ	み
黄	村雨の露のまだ干ぬまきの葉に	霧立ちのぼる秋の夕暮れ	む	む
黄	八重むぐらしげれる宿の寂しきに	人こそ見えね秋は来にけり	やえ	やえ
黄	山川に風のかけたるしがらみは	流れもあへぬ紅葉なりけり	やまが	やま
黄	由良の門をわたる舟人かぢを絶え	ゆくへも知らぬ恋の道かな	ゆら	ゆ
黄	夜もすがら物思ふころは明けやらで	ねやの隙さへつれなかりけり	よも	よ

色	上の句	下の句	決まり字 (競技かるた)	決まり字 (五色百人一首)
緑	小倉山峰のもみぢ葉心あらば	今一度のみゆき待たなむ	おぐ	お
緑	君がため春の野に出でて若菜つむ	わが衣手に雪は降りつつ	きみがためは	き
緑	恋すてふわが名はまだき立ちにけり	人知れずこそ思ひそめしか	こい	こい
緑	心あてに折らばや折らむ初霜の	置きまどはせる白菊の花	こころあ	こころあ
緑	心にもあらで憂き世に永らへば	恋しかるべき夜半の月かな	こころに	こころに
緑	契りきなかたみに袖をしぼりつつ	末の松山波こさじとは	ちぎりき	ちぎ
緑	千早振る神代も聞かず龍田川	から紅に水くくるとは	ちは	ちは
緑	月見れば千々に物こそ悲しけれ	わが身一つの秋にはあらねど	つき	つ
緑	夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを	雲のいつこに月やどるらむ	なつ	な
緑	花の色は移りにけりないたづらに	わが身世に経るながめせし間に	はなの	は
緑	人はいさ心も知らずふるさとは	花ぞ昔の香に匂ひける	ひとは	ひ
緑	安らはで寝なましものをさ夜更けて	かたぶくまでの月を見しかな	やすら	や
緑	夕されば門田のいなばおとづれて	蘆のまろやに秋風ぞふく	ゆう	ゆ
緑	世の中は常にもがもな渚漕ぐ	あまの小舟の綱手悲しも	よのなかは	よ
緑	わが庵は都のたつみ鹿ぞ住む	世をうち山と人はいふなり	わがい	わがい
緑	わが袖は潮干に見えぬ沖の石の	人こそ知らねかわく間もなし	わがそ	わがそ
緑	忘らるる身をば思はずちかひてし	人の命の惜しくもあるかな	わすら	わすら
緑	忘れじの行く末まではかたければ	今日かぎりの命ともがな	わすれ	わすれ
緑	和田の原八十島かけて漕ぎ出でぬと	人には告げよあまの釣舟	わたのはらや	わた
緑	侘びぬれば今はた同じ難波なる	みをつくしても逢はむとぞ思ふ	わび	わび

色	上の句	下の句	決まり字 (競技かるた)	決まり字 (五色百人一首)
オレンジ	逢ひ見ての後の心にくらぶれば	昔は物を思はざりけり	あい	あい
オレンジ	明けぬれば暮るるものとは知りながら	なほ恨めしき朝ぼらけかな	あけ	あけ
オレンジ	朝ぼらけ宇治の川霧絶え絶えに	あらはれ渡る瀬々のあじろぎ	あさぼらけう	あさ
オレンジ	あらざらむこの世の外の思ひ出に	今一度の逢ふ事もがな	あらざ	あら
オレンジ	哀れともいふべき人は思ほえで	身のいたづらになりぬべきかな	あわれ	あわ
オレンジ	今来むといひしばかりに長月の	有明の月を待ち出でつるかな	いまこ	いまこ
オレンジ	今はただ思ひ絶えなむとばかりを	人づてならでいふよしもがな	いまは	いまは
オレンジ	おほけなく浮世の民におほふかな	わがたつ袖に墨染の袖	おほけ	おほけ
オレンジ	逢ふ事の絶えてしなくばなかなか	人をも身をも恨みざらまし	おふこ	おふこ
オレンジ	風そよぐ奈良の小川の夕暮れは	みそぎぞ夏のしるしなりける	かぜそ	か
オレンジ	瀬を早み岩にせかるる滝川の	われても末に逢はむとぞ思ふ	せ	せ
オレンジ	なげきつつ独り寝る夜の明くる間は	いかに久しきものとかは知る	なげき	なげ
オレンジ	名にしおはば逢坂山のさなかづら	人に知られでくるよしもがな	なにし	なにし
オレンジ	難波江の蘆のかり寝のひと夜ゆゑ	身を尽くしてや恋ひわたるべき	なにわえ	なにわえ
オレンジ	難波がた短き蘆のふしの間も	逢はでこの世をすぐしてよとや	なにわが	なにわが
オレンジ	春の夜の夢ばかりなる手枕に	かひなく立たむ名こそ惜しけれ	はるの	は
オレンジ	人も惜し人も恨めし味気なく	世を思ふ故に物思ふ身は	ひとも	ひ
オレンジ	御垣守衛士のたく火の夜は燃え	昼は消えつつ物をこそ思へ	みかき	みかき
オレンジ	みかの原わきて流るる泉川	いつみきとてか恋しかるらむ	みかの	みかの
オレンジ	見せばやな雄島のあまの袖だにも	ぬれにぞぬれし色は変はらず	みせ	みせ